

『梵網經』における「自誓受戒」について

任 京 美

はじめに

大乘菩薩戒の特長の一つが「自誓受戒」である。自誓受戒が戒の精神を重視していることは明らかであるが、問題は自誓受戒を受ける時にも特別な条件が必要とされたことにある。その自誓受戒の特徴となるのが、『梵網經』第 23 輕戒に説かれている「好相」である。本稿では『梵網經』の自誓受戒について『華嚴經』の影響を考慮にいれ¹⁾、「修証論」に着目して考察していく。

1. 「自誓受戒」のはじまりとその変化

まず、自誓受戒のはじまりとその作法の変化について見ていくことにする。

自誓受戒とは、戒を授ける戒師がおらず、自ら戒を守ることを誓って受戒することを意味する²⁾。これは一般的に大乘戒として認識されているが、その内容は大乘經典のみならず、律藏からも見出される³⁾。『十誦律』(T23・410a)では迦葉が自誓受戒をして具足戒を受けたと書かれており、また『薩婆多毘尼毘婆沙』(T22・511a)にも類似する内容が見られる。しかし、律藏においては迦葉以外に自誓受戒をした人物は見当たらない。一方、大乘經典には自誓受戒の具体的作法を説いているものが多く見られ、やはり大乘仏教では自誓受戒が十分に認められていたことが分かる。

例えば、『地持經』(T30・919a, AD.418 曇無讖訳)では、受戒者が仏像の前で袈裟をつけ、ひざまずいて誓願を立てることを三回繰り返すだけで自誓受戒が成立すると書かれている。ここでは『梵網經』と違って好相を必要としていない。自誓受戒の作法は、基本的に『地持經』のように、誓願を立てて戒を受けることである。同經に見られる作法は、原始仏教から変わらないことではあるが、自誓受戒だけを認める『占察經』(T17・904c, 中国成立説)では、誓願に加えて「懺悔」が勧められている。そして、清淨戒を求めて受けようとするならば、身口意を清淨に

して懺悔すべきであると説いている。本稿で考察する『梵網經』では懺悔をした上で、さらに「好相」を強調する。好相を強調している經典は『梵網經』のみならず、『善戒經』(T30・1014a, AD.341 求那跋摩訳)の自羯磨にも見られる。『善戒經』には、受戒者が誓願を三回繰り返した後、諸仏菩薩の相が現れる見仏体験をしたならば、得戒したことになると説かれている。必ずしも時代の変化により自誓受戒の条件が増えたとは限らないが、自誓受戒の作法には、誓願・懺悔・好相という条件が付加されたと考えられる。

このような条件付きの自誓受戒は、中国で曇無讖(AD.385-433)によってはじめて実践されたと指摘されている⁴⁾。曇無讖は『涅槃經』などの訳で有名な翻訳僧ではあるが、菩薩戒を広め、多くの受戒者を輩出した人物としても知られている。特に弟子の道進に菩薩戒を授ける記述があり、好相を要求する自誓受戒において重要な手がかりとなる。

2. 『梵網經』における「自誓受戒」の特徴

『梵網經』の自誓受戒が他經典と相違するところは、何よりも懺悔と好相を強調する点である。菩薩戒を受けるためには、まず懺悔が必要であるが、『梵網經』第23 輕戒(T24・1006c)では懺悔を通して業障を消すことと同時に、好相による証明を要求する。また、好相については『梵網經』第41 輕戒(T24・1008c)に仏陀が来て頭を摩ったり、光を見たり、華に包まれることなどが好相であると明確に示されている。その中でも見仏体験が代表的な好相であるため、次は見仏を中心に考察していく。

見仏とは、三昧の状態で仏菩薩を見ることを意味する。大乘仏教思想史の重要な流れであり、『梵網經』と深い関係を持つ『華嚴經』の「十地品」の中では、修行の過程で見仏体験が次々と述べられている。ここで『華嚴經』の十地を取り上げるのは、『梵網經』の自誓受戒の思想的な根拠を、十地から見つけることができるからである⁵⁾。

『梵網經』上巻の初め(T24・997c)には、釈迦仏が「一切衆生は何の因縁をもって菩薩の十地道を得ることができますか」と問う。それに対して、盧舎那仏は「心地を修行することが因になる」と答える。經典の冒頭にこのような記述があるのは、『梵網經』が菩薩の十地道を説く經典だからであろう。そのため、十地との関連性を無視することはできない。

荒牧典俊[1983]は十地思想の核心問題を「不退転」にあると指摘し、宗教体験

を通して不退転の求道が始まるという展開を述べる⁶⁾。不退転の地位である「不動地」は、經典によってその説が多少異なるが⁷⁾、初地において誓願を立て次第に向上し、不動地に至って菩薩行の不退転になるという枠組みは一致する。十地における見仏は不動地のみならず、すでに初地から各段階で現れている。ただし、初地から七地までの見仏と不動地以後の見仏には差異がある。『華嚴經』の見仏は、基本的に供養を前提とするが、七地までは自分の願力によって見仏を行い、以後は三昧の力によって見仏が持続すると解釈されている。

不動地で体験される見仏の内容を探ってみると、『華嚴經』（T10・200c）には、
佛子，菩薩住此不動地已，以三昧力，常得現見無量諸佛，恒不捨離承事供養。

といい、『漸備一切智德經』（T10・484a）には

無能退轉，以故名曰入無動地。…成三昧定，威力所入，見佛供養。

と説かれている。これらの經典では三昧・見仏・供養が共通点になっている。菩薩が不動地を得るということは、三昧に入り、見仏供養をすることであり、見仏供養は三昧の状態でなければならないことになる。そして、修行をしないと三昧には入れないので、三昧・見仏・供養はすべて菩薩の実踐行としての修行に基づいていることになる。また、『十住經』（T10・522c）にも

行菩薩道，以不轉相故，是故此地，名為不動。諸佛子，諸菩薩摩訶薩，在不動地，善生禪定力故，常不離見無邊諸佛。

と説かれている。

以上で分かるように、「不動地」を得ると、見仏体験をする。その見仏体験をするためには三昧の力が必要であるが、そのため『梵網經』では懺悔を勧める。これは、単純に罪の滅罪だけを求めるのではなく、修行に努め、大乘菩薩徒として不退転の地位に入ることを目的とするためであると考えられる。なぜなら、『梵網經』では七日間懺悔をして好相が見られなかったら、その体験をするまで自誓受戒は得られないからである。自分が犯した罪の懺悔なら、それを告白して悔いることだけで済むことが、自誓受戒では仏菩薩の証明が要るほど確固な求道心まで求められるのである。

また、『梵網經』第四十一輕戒では三世千仏に礼をするところまで至れば、好相が見られると説くが、仏菩薩に礼拝するということは懺悔の長い歴史的な伝統といえる。これは発心して仏菩薩に礼拝供養し続けると、仏菩薩に近づき会えるという構造である。懺悔礼拝をし、身命を捨てても菩薩道から退転することのない「不退転」の地位、菩薩の地位を得ることこそ菩薩戒を受ける意義であり、『梵

網經』の「自誓受戒」に含まれている「修証論」の内容であると考えられる。

おわりに

以上、自主的な倫理問題が核心となる戒律の受得において、『梵網經』における「自誓受戒」の特徴となる「好相」を、果たしてどのように受け止めるのかについて疑問をもって見てきた。特に「修証論」という立場から、『梵網經』における自誓受戒の特徴を、『華嚴經』の十地と関連して検討することにした。

『梵網經』の結經である『華嚴經』の「十地品」に現れているように、好相（見仏）は修行を重ねてきた上での体験である。『梵網經』では『華嚴經』の影響を受けて「自誓受戒」をする受戒者に、菩薩の「不退転」の地位に至ったという証拠として好相を見るように要求したと考える。その「不退転」の地位を得るため、受戒者は懺悔修行をするのであり、菩薩の地位を得たという受戒の証明として好相を見るのである。このように、『梵網經』の「自誓受戒」で要求する好相は、「修証論」の一部として受け入れるべきである。懺悔修行を通して菩薩の「不退転」の地位に至るという「修証論」の立場から理解することこそ、『梵網經』の「自誓受戒」に最も重要な意義を付与することになると考えられる。

- 1) 『梵網經』が『華嚴經』の影響を受けて成立されたことは、先行研究において数多く指摘されてきた。特に白土わか[1969]（「梵網經研究所説」『大谷大学研究年報』vol.22, pp.105-153）は梵網の菩薩の十処が華嚴の十地に対して説かれたことや経題の「梵網」などを根拠にして両経典が結經であることを証明した。
- 2) 竹田暢典「自誓受戒の意義」勝又俊教博士古稀記念論文集『大乘仏教から密教へ』春秋社、1981, pp.1167-1180
- 3) 『十誦律』（T23・410a）では迦葉が自誓受戒をして具足戒を得たと説く。
- 4) 船山徹「六朝時代における菩薩戒の受容過程」『東方学報』vol.67, 1995, pp.1-135
- 5) 沖本克己[1981]（「大乘戒」講座大乘仏教Ⅰ『大乘仏教とは何か』春秋社, pp.183-221）も、『梵網經』が『華嚴經』と共通する教理を展開すると指摘する。
- 6) 荒牧典俊[1983]「十地思想の成立と展開」講座大乘仏教『華嚴思想』3, 春秋社
- 7) マハーヴァスツ十地では八地と九地で不退転の菩薩になり、般若十地と本業十地では七地で不退転になる。

〈キーワード〉 梵網經, 自誓受戒, 好相, 見仏, 修証論

(花園大学大学院)

cuss the “*zhaihui*” service and the “*jiangjing*” assembly, piece together and reconstruct the development of the “*zhaijiang*” usage throughout Chinese Buddhist history.

90. The true meaning of six “Non-enlightenments” in the *Shi-moheyan lun*

Daishin SHIMAMURA

91. On “self ordination” in the *Fanwang jing*

Kyung-mi IM

One characteristic of Mahāyāna bodhisattva precepts is the idea of “self-ordination”. In the case where one has no teacher, self ordination means vowing to keep the Buddhist precepts personally. Although in self ordination the spiritual aspect is stressed, there also need to be certain conditions for it to take place. This characteristic is explained in the idea of “visionary experience”, found in the 23rd precept of the *Fanwang jing*. This essay examines the influence of selfordination as found in the *Fanwang jing*, taking into account the *Huayan jing* and the point of view of practice.

Visionary experience is built up through practice. In this way, the visionary experience is based on practice, and the person who completes “self ordination” follows the influence of the *Huayan jing* in the *Fanwang jing*, hence bodhisattva non-regression is necessary for visionary experience. The disciple of the Buddha is penitent, practices and sees the visionary experience as proof of ordination. Accordingly, the visionary experience found in “self ordination” of the *Fanwang jing* should be understood from the point of view of practice.

92. Research on the Meditation on the Lotus Sūtra (法華三昧) in the *Tiantai sijiao yi* (天台四教儀)

Chong-nam KIM